

戯曲心理描写に注力

文人の 武蔵野

1950年に発表された大岡昇平の小説「武蔵野夫人」は、翌年、映画化されるとともに戯曲化もされています。戯曲「武蔵野夫人」を上演した文学座のパンフレットには、大岡昇平からの往信「戯曲『武蔵野夫人』を読んで」と、戯曲を担当した福田恆存からの復信「『武蔵野夫人』の原作者へ」が掲載されていて、興味深い舞台裏が垣間見られます。

大岡昇平 ⑫



小説「武蔵野夫人」を戯曲化した福田恆存

往信には、大岡が福田に「秋山を主人公にして私小説にして」と指摘されて「勉を主人公と呼ぶことは出来ないでせうか」とこっさり聞いたというエピソードが記されています。そして福田によって劇化

された戯曲を読み、勉を「主人公らしい主人公にして下さった」と感謝の意を述べるとともに「びびくりしました」とも記しています。

福田としては、小説「武蔵野夫人」では勉が主人公になりきれていないので、いっそ大岡の影がある秋山（大岡と同じスタンダードル研究者で大学の講師）を主人公にして人物像を掘り下げれば「私小説

的に深まるのではないかと、と言いたかったのでしょうか。

しかし、批評した対象である小説をみずから戯曲化する際には、秋山を主人公にするのではなく、勉を主人公にしました。復讐者である勉に「自由」の観念を与えてその思想を台詞に落とし込みました。そこを大岡は称賛したのでした。

復信で福田は今回の戯曲化を「脚色」と呼び、それは初めての経験であるとしています。最後まで「脚色」ならでの苦勞を比喩的に語り通し、「今度はぜひ御自分で戯曲をお書きください」と締め

ているのですが、その中で、小説の長所を捨てることになると述べています。福田が小説の長所であり再現できないと判断したのは、おそらく全

編にわたる武蔵野の自然描写です。

上演時期が筆者の生前のため未見ですが、戯曲やパンフレットからは、お芝居でも「俗にはけ（峽）」と呼ばれる武蔵野の「隅」を舞台に表現していたことがわかります。ですが、勉が武蔵野の自然を「再発見していくこまやかな描写などは、再現不可能だったのでしよう。だからこそ戯曲では台詞による心理描写に注力し、それが成功したのだと思われま

す。
（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。



過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。